2010年(平成22年)
第32号
(8月15日)

平安月報

The HEIAN monthly report

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　宮地啓安
〒605-0041　京都市東山区三条蹴上
TEL (075)762-2211　FAX (075)762-2266

ＷＣＲＰ４０周年記念イベント来月開催　～奈良・京都両会場にて～

１９７０年、世界３９ヶ国から３００人の宗教者が集い、第１回世界宗教者平和会議（ＷＣＲＰＩ）が京都において開催された。以来、約５年ごとに世界大会が開かれ、２００６年には再び京都において第８回大会(約１００ヶ国から２，０００人)が開催された。

その間、国連ＮＧＯ(非政府組織)の経済社会理事会の「総合協議資格」(カテゴリーＩ)を有し、またオバマ米大統領が設けた「大統領府諸宗教評議会」の委員に、ベンドレイＷＣＲＰ国際事務総長が選任されるなど、国際的に認知された組織へと大きく成長した。

本年、ＷＣＲＰＩが開催されて、４０周年を迎えるにあたり、青年宗教者によるＷＣＲＰグローバル・ユースネットワークが主導して、全世界でＡＲＭＳ　ＤＯＷＮ！キャンペーンが展開されている。同キャンペーンの締めくくりとして、ＷＣＲＰ発祥の日本において、記念行事が開催される。

平城遷都１３００年祭が行われている奈良を主会場とするとともに、ＷＣＲＰ発祥の地、京都でもイベントが予定されている。

京都プログラム

・イスラーム指導者会議　9月20日(月)～22日(水)
・公開シンポジウム　9月23日(木) 14：00～
「日本の宗教とイスラームの対話」
（国立京都国際会館ルームＡ）

奈良プログラム

【奈良県新公会堂会場】
・世界宗教者まほろば大会
9月26日（日）9：30～27日（月）12：00
・公開講演会
「アジアにおけるまほろば実現に向けて」
9月25日（土）13：30～16：00
・東アジア青年宗教者４ヵ国会談
9月25日（土）9：00～12：00
・インターナショナル フレンドシップ コンサート
9月25日（土）18：30～20：30

【東大寺大仏殿前会場】
・ARMS DOWN！キャンペーン終了式典
9月25日（土）16：20～17：20

私にとってのアームズダウン
～世界平和の実現を確信～

京都教会アームズダウン実行委員長・古田雅章

８月４日から５日、勤務先の労働組合の平和活動として広島に行きました。今年は世界中が変わろうとしている、何か大きなパワーを感じました。

４月から清水寺での署名活動を始め、修学旅行生の５月、ほぼ毎日実施の６月、湿気と雨の７月を乗り越え、この活動も残り２ヶ月。京都教会では、１２万署名に達しました。この一つひとつの署名、関わっていただいた会員の皆様の思いを強く感じています。

私自身も、会社で仲間や仕事のつながりのある人に声をかけ、実家の仲間にお願いしたり、街頭での署名活動を通して、今「この時代にこの瞬間にアームズダウン！に出会えたこと」に心から感謝しています。なかでも、たくさんの方の多大なご協力が、ほんとうに私の心の支えとなりました。

庭野開祖のご著書「平和への道」にある『世界連邦』という考え方が、私の中でどんどん広がっています。そして、「世界平和」が決して遠い存在ではなく、必ず成し遂げらると確信しています。当キャンペーンは９月２５日で終了ですが、平和活動はこれからもずっと続きます。「核兵器」を無くし、「戦争」を無くし、誰もが安心して暮らせる世の中を目指して、これからも休むことなく足元の実践に取り組んでいきます。

時事刻々

八月六日、広島は六十五日目の原爆の日を迎えた。平和式典には、パン・ギムン国連事務総長をはじめ、米国ルース駐日大使、英仏の代表が初めて参列した。犠牲者への鎮魂から、ヒロシマが核廃絶に向けた象徴へとなる出来事だった。

本会では「アームズダウン・キャンペーン」を実施しているが、残り一カ月ほどになった。

この運動を通じて、京都教会に所属する吉田ＬＥＯさんが、応援歌になるようにと、キャンペーンソングを作った。

崐Arms Down!　それは　許しあうこと
♬Arms Down!　それは　認めあうこと
崐Arms Down!　それは　愛しあうこと
♬Arms Down!　そして　幸せになる

暴力より理解、殺戮より助け合い、憎しみより愛をと訴えている。

このキャンペーンソングに載せて、核廃絶の願いが世界中に広がることを願いたい。

「こころの健康を得るために」　かめおかこころ塾・特別シンポジウム

平成２２年７月１０日（土）、亀岡保育園において、亀岡宗教懇話会が主催する「かめおかこころ塾」の特別シンポジウムが開催された。今回は、「こころの健康を得るために」をテーマに、青葉学園理事長・村田浩道氏による基調発題に始まり、大本本部管理局次長・猪子恒氏がコーディネーターを務め、村田理事長に加え、日本基督教団丹波新生教会牧師・竹ヶ原政輝氏、立正佼成会京都教会長・中村憲一郎氏、的真塾京都国際禅堂代表・宝積玄承氏、八幡宮社宮司・宮内寛氏の４人のパネリストによる，ディスカッションが行われた。

現代の日本人は、身体の健康のためにはお金を惜しまない。三度の食事のほかに、サプリメントを飲み、高額な健康器具を購入する。

しかし一方で、自殺者３．２万人、ひきこもり５０万人、不登校は数え切れないほど多い。

目に見えるものしか信じない、便利さを追求する現代人に、宗教者から「こころ」の健康についてのメッセージが届けられた。

盂蘭盆会で中西永観堂管長のご法話

７月１５日（木）、京都教会において、会員の先祖を慰霊する盂蘭盆会が催された。その式典で、浄土宗西山禅林寺派管長・中西玄禮師の講演が行われた。師は、仏教の三本柱「報恩感謝（ほうおんかんしゃ）」「懺悔滅罪（さんげめつざい）」「誓願立志（せいがんりっし）」を豊富な事例をもって紹介し、ユーモアにあふれた、親しみのあるご法話に、参集した数百人の会員は、あたたかいものを感じ、仏の教えに親しむことができた。（３面にご法話の要約を掲載）

子供たちが世界平和に貢献　ゆめポッケを発送

７月２４日、婦人部と少年部によるゆめポッケ発送式が行われた。紛争や対立で傷ついた子供たちに思いやりや真心が届くようにと、祈願供養が行われ、２６２袋のポッケが本部に向けて発送された。

発送式を企画運営した婦人部の代表から「今まではポッケの中味（文房具など）の協力だけでしたが、今年は運営をさせていただきました。大人になってからではなく、子供の時から世界平和に携わることの大切さを学び、笑顔で取り組んでいる子供たちを見て、自分自身が平和活動に触れていくことが大切だと感じました。子供たちと一体感が味わえた」との発表があった。

今月の言葉　～布施の精神で『恩送り』の生活を～　京都教会長・中村憲一郎

今月の会長法話は、「布施は智慧を開く」です。「施しをすることで執着を離れると、ものごとをありのまま素直に見ることができます。そこで、固定観念がとれてきて、人間に本来具わる智慧の眼が開き、ものごとの実相(本当の姿)が見えてくるのです。まさに「布施は智慧を開く」というわけです」と庭野会長は説かれます。

思い返してみると、私たちは日頃の生活の中で「ああなってほしい。こうなってほしい。○○はこうあるべき」といつも執着と固定観念を持って、思い通りにならないことに腹を立てながら生活しています。思い通りにならない世の中であることは承知していても、なおこうした執着と固定観念が捨てられず、苦しみもがいているのです。

この苦しみのもとから開放される術は何か？ずばり「施し(布施)」だというのです。しかも、いつでも、どこでも、だれにでもできる「施し」があるというのです。それは「無財の七施」です。やさしい眼差し、にこやかな笑顔、あたたかな言葉、奉仕、思いやり、席や場所を他の人に譲る、憩いの場を提供する――こうした行いが、周りを明るくするだけでなく、私のとらわれや執着を取り払ってくれるというのです。一挙両得です。

良く考えてみると、私たちは毎日、天地自然の恵みはもとより、さまざまな国や地域の方々の恩恵に浴して生活しています。お金の対価以上の恵みを頂いている、その事実に心を馳せてみると、持ちつ持たれつの世の中で、一方的に「持たれて」いることはできないはずです。自分が頂いた恩恵を、頂いた人に直接返すのではなく、他の人々に施していく、これを「恩返し」ではなく、「恩送り」というそうですが、そんな生き方をすることが、60 有余年前に、尊い命を犠牲にしてこの国を守って下さった戦争犠牲者の御霊への回向となる。と同時に、一人ひとりのこの生き方こそが、平和の礎となると信じます。今月は、こうした「布施」の精神で生活して参りましょう。

祇園祭を美しく　清掃ボランティアに参加

祇園祭の宵々々山（７月１４日）、宵々山（１５日）、宵山（１６日）の３日間、明るい社会づくり運動の会のメンバーが、烏丸四条で「美しい祇園祭をつくる会」主催の清掃ボランティアに参加。年々参加者が増え、街並みの美化に貢献している。

本会青年、歴史を背負う　祇園祭山鉾を曳き

７月１７日（土）日本三大祭りの一つ「祇園祭」に京都教会青年部が参加した。この曳き手ボランティアは２３年前から取り組んでおり、今年は１０名の青年部員が「郭巨山（かっきょやま）」のご町内に加わり、千余年の歴史を体で感じた。

●至らない者

佼成会のことば（行法ガイドブックより）

私たちは日ごろ「至らない者」の存在であることを忘れて、人を見下し、人の上に立とうとしがちです。しかし、自分をよく見つめてみると、完成された人間かどうかはすぐに分かります。まして仏さまの目から見たら、私たちはまだまだ「至らない者」です。そうした「至らない者」同士、お互いに補い合い、協力し合って生きていく。だからこそ、至らない自分であるけれども、人を導いたり教えたりして人さまのお役に立つことができるのです。そこに調和が生まれ、自分自身の向上にもつながっていきます。そして、見るもの聞くものすべてを仏さまの説法と受け止めることもできるようになってくるのです。

「自」という字は「絶対」という意味があり、「分」という字は全体の中の一部分という意味があります。この全体を「仏」に置き換えて見ますと、自分は仏の一部分であり、仏の絶対性と等しいということです。仏と等しいという仏性の自覚が深まれば深まるほど、現実の自分の至らなさが見えてきて、謙虚になって精進する心にもなれます。そうした精神が、この「至らない者」という言葉には込められているのです。

先祖や自分、すべての人の命に感謝を　浄土宗西山禅林寺派管長・中西玄禮氏講演要旨

みなさんこんにちは。中西と申します。永観堂善林寺に単身赴任をしてまいりまして、もう大方５ヶ月が過ぎまして、今、６ヶ月になります。

お釈迦さまの教えを一口で言うのは難しいことですが、お釈迦さまの教えの中に、誰もが避けることのできない苦しみとして「生老病死」（四苦）があります。四苦を「生まれたときは喜ばれ、老いては嫌われ、病んでは飽きられ、死んでは忘れられる」と言ったひとがいるが、そうあってはならないのが大事です。

今日は、亡くなられたご先祖のみたまのご供養をなさいました。それは生まれたときに喜んでくれた親や先祖の命が私を支えていてくれていると思うから、お参りされたのですね。今日ご供養いただかれた皆さま方のご先祖は忘れられることなく、ご供養をお受けになりました。これでないといけません。

日本に伝わってきた大乗仏教には、三つの共通した柱があります。その一つは「報恩感謝」です。「恩」という字は、原因の「因」の下に「心」がついています。「因縁を思う心」ですが、これは「命の因縁」です。

結婚式で、新郎新婦へのはなむけの言葉として、「三つのふくろを大切にしましょう」というのがあります。三つのふくろとは「おふくろ」「いぶくろ」「かんにんぶくろ」です。全部これは「命」につながっています。

「おふくろ」は「親の命、ご先祖」。「いぶくろ」は「私の命」。「かんにんぶくろ」は「親や先祖、自分以外の人々の命」です。こうした恩に報い感謝するというのが「報恩感謝」です。

二つ目は「懺悔滅罪」。「私が至りませんでした」と素直に反省・懺悔することです。仏教には、自分が犯してきたいろんな罪を心の底から自己反省することで、初めて仏さまに出会えていくと教えられています。

三つ目は「誓願立志」です。一人でも多くの人の幸せのために、この命を使わせていただきましょうということです。日本語には「恩返し」という言葉と「恩送り」という言葉があります。自分が受けた恩を別の人に送ることを「恩送り」といいます。みなさんにとって大切なことは、みなさんの信じる教えを一人でも多くの人に送り続けていくことです。

約束の時間がまいりました。今日は尊いご縁をいただきまして、本当にありがとうございました。

庭野開祖の宗教観・平和観　「一乗の道」

《テヘランの米大使館人質事件》

プリンストンでの第３回世界宗教者平和会議（ＷＣＲＰⅢ）が終わって３ヶ月が経った昭和 54 年 12 月のこと、アメリカの上院議員団から、思いがけない話が庭野開祖に届いた。**「イランのホメイニ師に会って、大使館の人質を解放するように説得してほしい」**という依頼だった。イランの首都テヘランで、米国大使館が大学生によって占拠され、大使館員など５０余人が人質として拘束される事件が起こったのは、その年の 11 月４日のことだった。

米国大使館を占拠した学生たちは「ホメイニ師路線に従うムスリム学生」と自称し、亡命中のパーレビ国王をアメリカが入国させたことに激しく抗議して、その身柄を引き渡すよう要求していた。アメリカとしては、大使館員を一刻も早く救出しなければならない。さりとて、アメリカ国内の病院に入院しているパーレビ国王をイランに送り返すことは、人道上からもできない。

半月経っても大使館の占拠が続き、米国の第七艦隊がペルシャ湾に集結した。それに対してホメイニ師は聖戦を宣告し、実質的な国家総動員令で強硬に対抗していた。国連では、ワルトハイム事務総長が緊急安全保障理事会を招集したが、イランはそれをボイコットしていた。相前後して、イランと国境を接するアフガニスタンでクーデターが起こり、ソ連軍の大部隊がアフガニスタンに介入して、世界の火薬庫といわれる中東がまさに一触即発の状態におちいった。

庭野開祖はじっとしていられない思いだった。この世界の危機に何も出来ずに手をこまねいている宗教者では、「何のために世界会議を開いているのか」と詰問されても仕方がない。そこにアメリカの上院議員からの要請が届いたのだった。それは、「イランと友好関係にある宗教者であり、世界宗教者平和会議の名誉総裁であるあなたならば、ホメイニ師に直接会うことも可能だと思う。ぜひイランを訪れて、大使館員を解放するよう説得してほしい」というものだった。

日本にいると、イランの米大使館人質事件といっても、遠い国の出来事としか思えず、一介の宗教者が口をはさむ問題ではないように考えがちだ。だが、**「宗教者であればこそ、平和的解決をもたらすことができる」**と期待し、その力を信じてくれる人が、世界にはいるのである。きっと、これまでの世界宗教者平和会議の活動を、期待を持って見守って下さっていた方々であろう。

その前年の昭和 53 年に、庭野開祖は国連史上初めて開かれた国連軍縮特別総会で、国連ＮＧＯに加盟している世界宗教者平和会議を代表して演説を行っていた。その時に国連総会議場において「三界は安きことなし。なお火宅の如し」という釈尊のお言葉を引用して、今や世界は燃え盛る炎の中にあるのも当然だとして、仏教の平和の教えについて述べた。

そして、飽くなき貪欲によってみずから苦しむ世界を救うために、世界の６０ヶ国を超える国々の宗教者が、戦争の放棄、さらに、その恐れを未然に防ぐことを目標に力を合わせて努力している世界宗教者平和会議の活動を報告して、**「特に偉大なるカーター大統領閣下とブレジネフ書記長閣下に対し、『危険を冒してまで武装するよりも、むしろ平和のために危険を冒すべきである』ということを申し上げたい」**と、スピーチを締めくくった。　（つづく）

他教団活動紹介　（中外日報７月３１日より）

●坐禅や作務など体験

大阪曹洞宗青年会（村山博雅会長）は７月２７日から２９日まで大阪府池田市の陽松庵（福本高芳住職）参禅道場で第４７回「大阪子供禅の集い」を開催した。大阪府や兵庫県から、夏休み中の小・中学生１２０人が参加し、３日間の禅寺生活を体験した。定員を上回る子供たちが同庵で夏休みを楽しんだ。

私たち kinki.genki　～泉州教会より～

平成２２年６月１０日（木）泉州教会に庭野会長にご来教して頂きました。会員の説法の後、ご講話頂き、先生を囲み記念撮影をいたしました。

（http://rkk-kinki.blog.ocn.ne.jp/sensyu/）

渉外部からのメッセージ

国連のパン・ギムン事務総長は「私が期日を決めることはできないが、平和市長会議は『２０２０年までの核廃絶』という目標を設定しており、われわれはその目標実現のために努力しなければならない」と発言されました。全世界の核保有数から考えると毎年多くの核兵器を廃絶しないとあと１０年で目標達成は出来ません。やはり国を動かすのは民衆の声です。私たちは諦めることなく訴え続けたいと思うのです。

この月報を読まれて感想などがありましたらお気軽にお寄せ下さい。　RKK 京都教会　FAX 075-762-2266